花火遊びを楽しく安全にするために

花火は、大人にも子供にも幅広く親しまれ、夏の夜ならではの風物詩として、家庭の庭さきで手軽に楽しめる遊びです。

しかし、安易な取扱い方をすると火災ややけどの原因となることもよくあります。

安全に楽しく花火遊びをするために、つぎの点に十分注意しましょう。

- ▼安全な場所を選ぶ
- ▼気象条件を考慮する
- ▼子供だけで遊ばせない
- ▼注意書きは必ず読む
- ▼火薬をほぐしたり、数本まとめて点火しない
- ▼必ず水の入ったバケツを用意する

言葉遣いのいろいろ ③

間違えやすい言葉

続 敬語編

誤用の多い敬語の一つに「参る」があります。

「行く」「来る」の謙譲語（へりくだった言葉）として、

「私もあとから参ります」

「課長が参りますまで、しばらくお待ちください」（来客に対して）のように使うほか、改まった言い方として、

「雨が降ってまいりました」

「暑くなってまいりましたね」などと使うのは正しい用法です。

しかし、

「先生、当地へはいつ参りましたか」のように相手に使えば失礼になります。また、「当地へはいつ参られましたか」と尊敬語の「れる」を付けて「参られる」としても、謙譲語との混合になって、やはり不自然です。この場合は、

「いつおいでになりましたか」

「いつ来られましたか」などと使うべきところでしょう。

また、近ごろでは、

「お待ちください」と言うかわりに、「お待ちしてください」と言ったり、

「お書きになってください」のつもりで、

「お書きしてください」と言う人が増えているようです。

これらは、「お（待ち）になる」という尊敬語の型と、「お（待ち）する」という謙譲語の型を混同しているのでしょう。

謙譲語を尊敬語として使わないように注意することが大切です。

父親と子供との会話

東京都立大学教授　詫摩武俊

子供の年齢にもよりますが、父親と子供との会話の内容は子供のことについて父親が尋ね、それに子供が答えている場合と、子供が自分の身辺で経験した出来事を父親に話している場合が圧倒的に多いように思います。「遠足はおもしろかったかい」と父親が尋ね、それにこたえて子供がいろいろ話したり、「お父さん、きょう、学校でこんなことがあったよ」と話すのを父親が耳を傾けることが多いのです。父親と子供が、子供のことについて親しく話し合うのはたいへん好ましいことです。

しかしこれとともに、父親が自分のことを子供に話すことも大切なことだと思います。職住分離といって、父親の働く場所が家庭以外のところにあることが多いので、子供は自分の父親が会社員であることは知っていても、実際にどんな仕事をしているか知りません。小学生はもちろん中学生であっても、自分の父親のことをよく知らないことが多いのです。

父親は、自分自身のことをもっと子供に話してもいいと思います。例えば幼いころはどんな遊びをしていたのか、自分の通学した学校はいまの小学校とどんなところが違っているのか、自分の育った家庭はどんなであったか、多くの職業の中からなぜ現在の仕事を選んだのか、話題はいろいろとあるでしょう。昭和二十年代の貧しい生活は、いまの子供にはこのような話を通してやっと理解できることだと思います。

それにも増して貴重なことは、父親にもかつて自分と同じような子供の時代があり、祖父や祖母からしかられたこともあったこと、いまの自分たちとは違う遊びをしていたことなどを知り、父親自身に親しみと共感をもつことです。さらに祖父母から父母、父母から自分にと伝わる生命の流れを感じとるかもしれません。

父親が子供に自分のことを話すとき、それをお説教の種にしたり自慢話に終始しないことです。淡々と話すことがむしろ子供の心にしみ込んでいくのです。